
今回の自己点検・評価活動については巻頭で述べたとおり、来るべき認証評価に備え、「全学を挙げて、自らの足元を見直すこと」そのものを重視した。

資料については一般的に、点検・評価に用いたフォーマットや、諸統計などの補足資料の掲載が望ましいと思われる。しかし、第一の目的である「全学を挙げて、自らの足元を見直すこと」に立ち帰り、諸統計に囚われず、本学の「今とここ」の息づかいを感じられる資料を掲載することとした。

資料については、自己点検・評価活動の一環として理事長、学長、学部長、教務部長による各研究室等へのヒアリングの議事録及び、授業評価アンケートの集計結果を掲載した。多摩美術大学の「今とここ」を感じ取って頂けたら幸いである。

なお、上記フォーマット等については自己点検・評価部会のホームページで公開している (<http://www.tamabi.ac.jp/accredit/index.htm>)。

日本画

- ・日 時：2004.6.24 13:30～14:30
- ・場 所：日本画研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長、
市川教授、戸田教授、榊田教授、米谷教授、
筆記：総務・石井

現状の報告

- ・日本画を多様な絵画表現のなかのひとつとして捉え、長い歴史を持つ東洋絵画の中の日本画とは何かを考え、次の世代での豊かな日本画の創造を目指すことを教育目標にしている。
- ・特徴的なことは、学年持ち上げりの担任制を敷いている。しかし、担任以外の先生にも積極的に指導を仰ぐように学生には指導している。
- ・多様な学生の確保ができるような入試方法をとっている。又、選考については、全員で行うので公正な選考を同時に行うことができる。
- ・入試の選考については、かつてトップクラスが他大学に流れたということがあった。そのため、多摩美でしか育てない学生を選考するようにしている。

評価と課題

（良い点）

- ・日本画では、年2回のコンクールを行っている。昔からずっと続いている伝統であり、小手先の諸改革には無い、根源的で骨太の教育方法だと自負している。又、その際には担任教員はあまり口出しせず、他の教員の意見を聴くことで多面的な教育を行える。
- ・批評会では、専任教員だけでなく、名誉教授などに参加して貰い風通しの良い、幅の広い視点を取り入れるようにしている。特別講義などのその一環だ。
- ・今年は、入試広報用としてフライヤーを作った。学生にとっては、自分の作品が取り上げられることで、活気が出てくる。
- ・受験生も多様化していて、将来CGをやる為の基礎力を養う目的で日本画を希望するという受験生もいる。日本画の方針としては、技術のみではなく卒業後、プラスになることを4年という短い期間でやって欲しいと考えている。既存の概念を壊したり、新しいものを作ろうとする好奇心旺盛な学生が出ていることは良いことだと思っている。
- ・そのような「日本画」というジャンルに囚われないところが多摩美の日本画の魅力である。
- ・学生の意欲が非常に高く、「臥龍桜日本画大賞展」や「佐藤太清公募美術展」などで大賞や入賞を数多く果している。その結果が口コミとして、現在の実績としてつながっていると思う。

（問題点）

- ・今の学生は、他の先生に指導を仰ぐように指導しても、なかなか自分から積極的に指導を仰ぎに行かない。
- ・最近では打たれ弱い学生が目につく。学生時代に、自分の制作活動に対するビジョンを、どうやって自らのものにして行くか学んで貰うのが難しい。打たれても伸びてくるような学生を育てていくのが重要と言える。

（その他、改善案など）

- ・作家にとっては、良い師との出会いが大切だと思っている。一方で、教員の出校のあり方も考えないといけない。質と量を同時に満たして行かないといけない。
- ・日本画を国際化の観点から考えていく時、「日本画」という定義を色々と考えていく必要があると思う。

油 画

- ・日 時：2004.6.24 10:00～11:00
- ・場 所：油画研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
今井教授、岡崎教授、木嶋教授、鶴見教授、野田教授、堀教授、室越教授、菊地助教授、小泉助教授
筆記：総務・石井

現状の報告

- ・1, 2年生の基礎実技期間については、学生の多様な表現、ニーズ、或いは特徴のある教育カリキュラムを検討し、この約10年をかけ、共通課題中心から徐々にジャンル(教室)別のカリキュラムへと移行している。2002年よりそれ以前の6教室制から、具象、抽象、同時代美術の3つのグループ制へと変更した。
- ・2004年度(本年度)からはグループ制(学生による希望選択制)が1年前期より行われることとなり、以降、1年後期、2年前期、3年前期の計4回のグループ選択が可能となった。このことで、各グループの独自性がより強調されるとともに、その都度の学生の移動によって、油画全体として活性化がなされた。1, 2年生は教室スペースの問題もあり、学生の希望が偏った場合は抽選となることもある。3年生以上は、ある程度教室スペースの遣り繰りを努力することによって、学生の希望に沿うようにしている。

評価と課題

(良い点)

- ・グループ(あるいはさらに細分化されたクラス)ごとのカリキュラムが先鋭化できる。
- ・様々なジャンルを、自由に学べるのが多摩美油画の魅力だと考えている。志願者数が・特段減っていない理由の一つでもあると思う。
- ・他学科とのつながりを促進するために、他のファインアート系および、情報アートコース等との授業を含めた交流を試みようとしている。

(問題点)

- ・グループ間の移動はできるだけ配慮しているが、アトリエの環境等のため、すべて自由というわけにはいかない。
- ・同様にスペースにゆとりがないので、卒業製作時(11月頃～)に4年生が十分にスペースを使えるようにするため、3年生のスペースが犠牲になっている。
- ・キャンパスが整備されハード面が良くなった一方、他学科との人間的つながりが希薄になっている。これは学生にとって決してよいことではない。

(その他・改善点など)

- ・アトリエ環境の改善に向け、絵画棟の整備をお願いしたい。その一環として自由デッサン室等の、学科を越えた有効利用および交流の可能性が開けるのではと考える。
- ・転部、転学科のハードルを低くすることで、他学科との交流が促進し、またその棟の整備と同調しながら、油画としての在籍実数の増加も視野に入れている。
- ・大学院生について、本年度制作スペースを犠牲にしても、年間を通じた発表スペースを、大学院アトリエの一角に検討したが、諸事情により実現しなかった。八王子という立地を考えると、都心にサテライト的な展示スペースが出来ないものか?
- ・美術館も、企画、やり方によっては、十分集客能力が見込まれるので、学外に対するアピールもさらに必要であると考えられる。
- ・日本の美術教育は、近代以降「アカデミズム」あるいは「基礎」に対して、疑問符を投げ掛けることなく現在に至った経緯がある。その意識すら薄れる昨今ではあるが、我々はつねにその疑問符を自らに問い続けなければならない。それは「デッサン力」についても同様である。
- ・現代の美術の動向をみると、ただ一方向に積み重ねていけばよいといった、ステレオタイプな成立の仕方ではなくなった。基礎からオリジナルにいてもよいし、オリジナルが先行し、それをきっかけにベーシックに立ち返るあり方があってもよい。
- ・各学科の横のつながりにおいて、共通教育のあり方がキ・ポイント。講義室で講義を聴くのと、制作現場で聴くのとでは大きな違いがある。共通教育の先生がアトリエに来て、我々と共同で授業をすることがあっても、学生には刺激になるであろう。

スペース等、もろもろの環境整備が実現するならば、学部、大学院とも在籍学生枠の拡大も検討していきたい

版 画

- ・日 時：2004.6.24 11:15 ~ 12:15
- ・場 所：版画研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
小作教授、小林教授、森野教授、渡辺教授
- 筆記：総務・石井

現状の報告

- ・自己点検・評価「各研究室の現状分析」により現状報告

評価と課題

(良い点)

- ・退学する学生が少ない。学生のケアを研究室、助手・副手が相当細かくやっている結果だと思う。
- ・版画の国際性を考えて、ミニプリント展 (http://db.tamabi.ac.jp/timpt/default_j.html) やシルパコーン大学 (タイ) との交換展、海外での各教員のワークショップ、実技指導など積極的に行ってきた。国際性を備えた学生育成のために現代版画論では、実用英語の力が必要と考え、取り組んできた。国際コンクールの応募要綱が読めること、英語のメールが送れること、HPを英語で作れること、を実践して来た。版画設立から10年でそういった力を備えた卒業生が育ってきた。

(問題点)

- ・博士後期過程については、実技と理論とのつながりが必要である。研究室と理論系教員とのコンタクトを高める意味で、講評会には理論系教員にも入って貰うように積極的にやっている。協力もあり、制作現場に参加して貰っている。指導は、作品だけ見てという訳に行かない。修士の時に何をやって来たのか、制作過程はどうであったか、修士の学生の中で博士後期の学生がどのような位置にあるのかを明確にする必要がある。理論系教員と実技系教員の密な連携が必要である。

(その他、改善案など)

- ・版画の志願者倍率が下がってきている。しかし中身を見してみると、倍率の高い他学科を蹴ってくる学生がいる。入学者の質は高くなっていると考えている。又、版画とデザイン系の併願も増えており、「自分のやりたいことが何か」ということを受験生がどれくらい意識しているか、分からない部分もある。片倉高校との高大連携も積極的に行っているから、受験生の版画に対する認識も上がってくると考えられる。高大連携等の取り組みを更に進めて行けば認識も上がり、版画単独受験者も増えるだろうと考えている。
- ・国際性を備えた学生育成のために、共通教育の先生方にも実践的語学教育(会話面など)でお手伝い頂きたい(語学教育の考え方は勿論理解しているが)
- ・版画は日本において国際発信できるジャンルだと誰しも認めている。予算があれば色々取り組みたい。特に最近はPC技術も進み、コストも安くなっている。
- ・美術館の使用について、一定期間学生の展示に開放するようなことがあっても良いかと思う。

彫 刻

- ・日 時：2004.6.30 13:30～14:30
- ・場 所：彫刻会議室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
安倍教授、石井教授、工藤教授、竹田教授、水上助教授
筆記：総務・石井

現状の報告

- ・1、2年次では彫刻の全体像が分かるように基礎的教育を行う。3年次以降、専門に分かれ素材と志向性について、教員との1対1の人的交流を通して教育を行っている。
- ・その成果は、学内ギャラリーや、八王子彫刻展などの産学官共同研究 (<http://www.tamabi.ac.jp/choukoku/kagai.htm>) を通して発表している。

塑像：卒業後に地域社会と密接した人材を育成したい。地道な昔からの技法をしっかりと学び、地域に還元できるような教育を心がけている。

金属：学生が造りたいことのイメージを膨らませ、金属でどのように表現するかを手助けしたいと考えている。学生自身の経験を形にしていく過程が大切だと思っている。

木彫：木という素材の特性上、基礎力が問われる。学生時代にしか学べない様ざまな基礎力(道具の研ぎ、扱い方も含め)を育成したい。確かな思考性テクニックに基づき、優れた作家に開花して欲しい。

石彫：基礎力をつけることが基本。一方で、最近の学生は素材に拘らず、学習意欲が旺盛。石彫自体、日本での歴史が浅く、その可能性がまだあるので、意欲的に取り組みたい。

諸材：学生個人の表現に対する考え方によって、何を表現するのかが違ってくる。学生との対話を重視して行きたい。

評価と課題

(良い点)

- ・公募展は二科の他、行動展、新制作など。コンペは健在だ。学生には、外に出て積極的に発表するように、アドバイスをしている。
- ・卒業後は、二足の草鞋で制作活動をつづける場合が多い。制作と経済的なバランスで、時間、場所も掛かるので大変なようではあるが、PC関係の仕事が意外に多い。彫刻制作の段取り、というのがPCのプログラム設計などなじみ易いかもしれない。他に教職や工芸の仕事をしている人が多い。
- ・紀要などに発表した技法講座は良い成果を出していると思う。DVD化などすれば、他学科にも十二分に応用可能な手法だと思う。

(問題点)

- ・八王子キャンパスが整備されて他学科との交流が少なくなった。油画、工芸、環境などと共通の部分があるとも思うが。
- ・美術教育を通して社会に貢献できる人材を育てたい。その為には、基礎教育が重要だが、彫刻は分野ごとの高度な技術修得も必要である。それを疎かにすると一つ一つの技術が軽いものになってしまう。その折り合いが難しい。今の学生は、朝早く来て仕事をするとか、健全な生活、精神を持って制作するという事が足りない部分がある。健全な精神を持った学生を育てるのも基礎教育だと思っている。
- ・外国のコンペが減ってきている。立体部門は難しいと言うことと、国際的にもコンペが減ってきている。

(その他、改善案など)

- ・芸大はセンター試験が終わると、実技に集中できる。多摩美は直前まで、学科の勉強が必要。芸大と日程が重なっていないが、試験に臨む余裕が無く、どちらか選べるとすると余裕のある芸大に流れてしまうのかも？
- ・油画が立体や映像のジャンルを始めているが、絵画を突き詰めると当然のことで、良いことだと思う。ただし学生がどういう教育を目指して入学して来るのか、難しい問題もあるので、交通整理は必要だろう。油画出身の博士課程の学生を一部受け入れているが、制度として考えるのは難しいと思う。ただ指導が必要なら、個人的にどんどん来て貰えば良い。
- ・助手・副手の負担増を何とかしたい。

- ・事務仕事が増えてきているので、事務パートを考えたい。

工 芸

- ・日 時：2004.6.30 11:15～12:15
- ・場 所：工芸ミーティングルーム
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
奥教授、中村教授、野口教授、池本助教授、井上助教授、小林助教授
筆記：総務・石井

現状報告

学生は非常に楽しんでやってくれている。特に問題はないと考えるが、志願者が減っているのと、卒業生への支援が課題だと考えている。

評価と課題

（良い点）

- ・志願者減に対応して、2005年度より自己推薦入試や一般入試の変更を行う。1年次にすべての分野を実習するプログラムにも変更を検討している。専門離れなどに対応した。何らかの起爆剤になればと考えている。
- ・昔、工芸分野は芸大しかなかった。展示会は三越や高島屋で、というのが相場だった多摩美の工芸が出来たことで、貸し画廊などで個展を開くという新しいスタイルが出来た。こうした新しい形を示すことで受験生にもアピールできると思う。
- ・共同研究で「新しい工芸教育をめぐる状況分析と総合研究」シンポジウムを行う予定だ。卒業生やジャーナリストも来るので、多摩美で作った新しいスタイルをアピールできると思う。又、どんな教育が良いのか、議論の場にしたい。
- ・工芸は世界的マーケットに対応できる。今までカリキュラムの中で理論の部分が弱かったので、工芸史や、大学院でのディベートの授業を取り入れた。自分の言葉で、説得力を持ってプレゼンテーションする力がこれからは必要。学生も熱心にやっている。

（問題点）

- ・志願者が減ってしまった原因がつかめない。工芸という分野が、若い人たちに伝わりにくいのかも知れない。但し、大学院では増加傾向にある。
- ・今までは1年生から専門分野に分けていた。予備校に聞くと18歳では、どの分野に進むべきか決められないと言う。若い人の専門離れもあるので、その辺の対応をしないといけないかも知れない（2005年度入試では、自己推薦入試では各専門分野別の募集、一般入試では志望プログラムを分けて募集する）。基本線は崩さないようにしたいが。

（その他、改善案など）

- ・卒業してから5～10年の期間が作家にとって非常に重要である。卒業後のケアを考えたい。例えば、自治体と協力して廃校を利用し、制作の場としても良いと思う。卒業生にとっては制作の場が確保できる、自治体にとっては若い人の活気と文化的支援というメリットがある。作家養成と社会貢献にもなるだろう（廃校利用などの形なので、大学にとっても負担はない）。多摩地域には廃校になるところもあると聞くので、是非大学として検討願いたい。工芸だけでなく他学科にも広げられる話だと思う。

グラフィック

- ・日 時：2004.6.28 16:15～17:15
- ・場 所：グラフィック会議室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
秋山教授、田口教授、中島(祥)教授、片山助教授、澤田助教授、小泉講師
筆記：総務・石井

現状の報告

- ・コミュニケーションデザインの本質を軸に、内容の充実を志向している。そのことが結果として最先端分野を拡充していくという好循環の構造を常に追求している。
- ・このことは少子化現象に対して危機感を持たばもつほど重要視される。
- ・1,2年次で基礎的力を身につけ、3,4年次で複合的に科目選択が可能なカリキュラム構成を取っている。分野別では、広告105・表現65・伝達20名くらいの比率でコースに所属し、分野の選択は、学生の希望に添って行われている。
- ・それらを補う意味で、産業界において第一人者として活躍中の卒業生を中心とした特別講師を、年数回招いて第一線の現場からの刺激を与えている。特別講義は、他学科を含め平均300名ほどの学生が受講している。熱気溢れる講義が行われ、学生の評価も高い。
- ・あくまでもデザイン教育がどうあるべきかを中心に据えて、大学として正攻法の改革を行う。

評価と課題

(良い点)

- ・2年 3年に進級する際、28科目全てについて1週間通してのオリエンテーションを行っている。基礎課程から専門課程への橋を架ける時間と捉え、自分の進む道を真剣に考えて欲しいということと、自分の選択する以外の分野への理解を深めて貰うことが狙いである。遅刻はしないこと、休んだ場合はその科目を取らせないなど、非常に厳しく行っている。
- ・写真系講座(清水・十文字先生)、Webデザイン系講座(福井・福田先生)、アニメーション制作系講座(斉藤先生)を充実させた。今後も更に拡充すべき分野と考えている。
- ・こうした取り組みを、受験生に分かりやすいように説明する。受験生向けフライヤーの工夫：カリキュラムの全貌が分かるように工夫した。年次を追って、誰が、何を、どんな意図で教えてくれるのかをダイアグラム化(マップ化)して示している。
- ・合格者の質を上げ、実質の難易度を高めるために、レベルの高い入学者を確保するよう努めている。そのために採点日を増やす等、教員一丸となって努力をしている。
- ・本学科も近年、社会貢献活動として、産学共同研究・官学共同研究を実施している。

(問題点)

- ・理論系科目の拡充が進んでいない。教員数の枠の問題もあり難しい。今後、各コースともに、研究分野に力を入れたい。

(その他、改善案など)

- ・授業環境の整備をお願いしたい。

1. 専任教員の増員

他学科に比べ、学生一人あたりの教員数が少ない。スケールを考えると、効率的授業の必要性についてはよく理解しているが、専任教員の定員枠について現時点より、さらに緩和を要望したい。一方で各コースの理論系を強くしたい。それが大学院の充実につながればと考えている。広告コースでは、他大学との提携の話も持ち上がっている。そこで、その核となる理論系教員についても専任教員枠を要望したい。

2. 教室面の整備

他学科と比べると面積が少ない。機材等が設置された作品制作室の整備を進めたい。一方で講座を拡充していることからの教室不足も理由である。これらの点を改善すれば、良い教育環境が学生から受験生に伝わり還流される。プレゼンテーションルーム用の部屋などあると学生には有益であると考えている。教育環境の基本的充実が学生の制作意欲を高め、良い影響を及ぼす。

プロダクト

- ・日 時：2004.6.30 10:00～11:00
- ・場 所：プロダクト研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
岩倉教授、川上教授、和田教授、安次富助教授
筆記：総務・石井

現状の報告

- ・2001年にプロダクト5ヵ年計画を作成し、2002年4月より実施し2年を経た。プロダクトデザインにおけるビジョン、目標、実施要領を定めた。
- ・ビジョンを「世界に通用する自立したデザイナーの育成」とし、目標を達成するために、入学、教育、進路の各課程において、カリキュラム、設備、人材のあり方を検討した。
- ・以下、評価と課題についても、「各研究室の現状分析」に詳細に亘り分析されているので、主だった質疑内容とする。
- ・産学協同プロジェクト
<http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/nec/nec98.html>
<http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/nec/nec99.html>
<http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/jcma/jcma.html>
http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/sony/sony_a.html
http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/sony/sony_b.html
<http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/kodak/kodak.html>
<http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/mew/mew.html>

評価と課題

(良い点)

- ・新入生の中には入学当初、グラフィックや環境に行きたかったという学生もいるが、2年になるころにはプロダクトに来て良かった、と言う。転部・学科する学生もいない。
- ・工具管理を学生に任せしたのは、非常に効果があった。工具長を決め、貸し出しや紛失について、責任を負わせている。その結果、4年生が工具の使い方を教えたり、卒業制作やオープンキャンパスを下級生が手伝うようになったり、学生の自主性と連帯感を出すのに成功した。

(問題点)

- ・入試結果については堅調であるが、センター試験の中から若干の辞退者があり、どこに流れて行っているのかわからない。何らかの調査が必要だと考えている。

(その他、改善案など)

- ・予備校訪問に行くと家具をやりたいという受験生から、「プロダクトデザインと環境デザインでは何が違うのか？」と質問を受ける。工業家具と木工家具の住み分けを受験生の希望に的確に応えられるように示すことが大学としての責任だと思う。
- ・家具デザイナーに限った就職先というのは非常に少ない。出口のことも考えて行かないと。
- ・就職は年々成果を上げ、今年の実績は8割方決まるころまで来ているが、かつてのように大企業が主という状況ではない。産業形態が変わり SOHO やフリーでやるような形態も増えている。プロダクトデザイナーが求められる場が多様化した結果だと思う。就職先の選択の幅が増えてきているので、企業回りをして適材適所の就職支援活動をしたい。
- ・シーメンスから、インターンシップと産学協同、リクルーティングを目的に申し入れが来ている。目標としている世界に通用するデザイナーの育成が急務だ。
- ・その為に、工学系とは違った美大の特色を出して行くこと、デザインに対する確固たる考えをもっている人材を育てないといけない。
- ・又、実践的な技術として、語学が必要。実際に日立からは、4年間でとにかく英語をやってくれと言われた。近年では、英語によ

るメール、レジュメ、ポートフォリオ作成やプレゼン、ディベート能力が必要だ。大学院では必須だ。

・大学院の課題

1. 現状、1つの部屋で、大学院教育、産学官共同研究、サロンTAMA・Pと入り乱れてやっている。内と外、上と下の交流が出来て良かったが、高いレベルの教育・研究が求められているということを痛切に感じる。プロダクトには大学院は必要無いという、かつての考え方を変えなければいけない。
 2. 学部教育のみの現役デザイナーの再教育、工学系学生のダブルスクール、ASEAN 諸国の学生の教育機能として、大学院は必要と思う。八王子には工学系大学含め、大学も多いし、場所も広いし、下宿先も安い。大学院教育に八王子はうってつけだと思う。
 3. 高卒に目を向けるのは当たり前だが、現役 17 万人のデザイナーの再教育に目を向ける必要がある。
- ・プロダクトの領域がますます広がると感じている。インダストリアルに、クラフツ（木、ガラス、金属、セラミック etc）、イノベータータイプ・デザイン（バイオ、ロボット、宇宙技術 etc）などへの拡大。インターフェイスなどの分野と、どうつげて行くか、デザインそのものの概念を問い直す必要がある。

テキスタイル

・日 時：2004.6.26 16:15～17:15

・場 所：テキスタイル研究室

・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長

弥永教授、高橋教授、橋本教授、檜垣教授、皆川教授、柏木助教授、川井講師

筆記：総務・石井

現状の報告

- ・学生の意識として、就職に対する希望が非常に強い。その多様なニーズに応えるカリキュラムに取り組んでいる。
- ・カリキュラムの基本は、1、2年生で染と織の基本をしっかりと学ぶ。3年生以降に、染と織いずれかに分かれて行く。又、その中でサーフェスデザイン、ウェアテキスタイル、繊維造形と言った3つの専門分野を選択して行くことになる。

評価と課題

（良い点）

・テキスタイルという幅広い領域をカバーしたカリキュラム改革を行った。

1. 3つの専門分野をカバーするカリキュラム。
2. 国際的視野を広げるための特別講義（ラーセン先生）。

・就職を意識したカリキュラム改革を行った。

1. 実践的なポートフォリオの作成技術の習得。
2. イラストレーター、フォトショップを使ったPC技術の習得。
3. 縫製技術、工業用ミシン等の実践的な技術習得（奥田、水野先生）。
4. テキスタイルの現場を知って貰うための連鎖講座の実施。

・良質の受験生を集めるために、フライヤーの作成、HP、学科紹介ムービーなど作成し、予備校などにも説明へ出向いた。

（問題点）

・産学協同研究については積極的に行い、卒業制作に学生が取り入れるなど、学生の意欲向上に非常に有益である。しかし企業の事情もあり、カリキュラム決定前に産学協同の計画が具体的になることが少ない。授業の課題と、産学協同が重なると、学生の負担が増えてしまう。スケジューリングの課題がある。大学院生と産学協同を結び付けていくのも一つのやり方だと考えている。

（その他、改善案など）

・入口と出口の問題が、一番の課題だと考えている。企画広報や就職課とも連携して、キメ細やかにやって行きたい。

- ・学生の要望が多様化している。ウェアテキスタイルの分野を取って見ても、服を作りたいとか、靴を作りたいとか様々だ。要望に応えるように一層努力して行かなくてはならない。
 - ・留学生の受入や派遣、対応を充実できれば、と考えている。
 - ・テキスタイルは、幅広く国際性も有しているので、社会貢献につながる。
1. 「絞り」という言葉は世界で通用する言葉になっている。ファイバーアートからテクスチャまで非常に幅広い。国際絞り学会の話が持ち上がっている。シンポジウムとワークショップに世界各国から 300 名以上は参加が見込まれる。社会的意義と共に学生や受験生へ良い影響がでたらと思う。詳細は色々詰めないといけないが。
 2. 共同研究のバナナ・テキスタイル・プロジェクト (<http://www.tamabi.ac.jp/tx/home/intoro02.html>) では、八王子繊維試験場、NPO、NGO、大使館などと連携をして取り組んでいる。将来的に非常に有望であり、学生も意欲をもってあたっている。

環境デザイン

- ・日 時：2004.6.28 13:30～14:30
- ・場 所：環境デザイン研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
飯島教授、川原教授、田淵教授、平山教授、山下教授、渡部教授、岸本助教授、松澤助教授
筆記：総務・石井

現状の報告

- ・1年生では全体で基礎を学ぶ。2年以降、インテリア、建築、ランドスケープの3つの系に分かれている。3つの系は、実技は選択可能、学科目は選択必修により分けられる。クラスの比率はインテリア3、建築2、ランドスケープ1の割合になっている。
- ・これら3つの系を縦糸として、産学協同を横糸にし複眼的に学べるように考えている。

評価と課題

(良い点)

- ・3つの系の教育課程をハッキリと示しているのも、環境デザインで何をやりたいのか？ということが決まっている学生が多い。受験生も環境デザインが第一志望という受験生が多い。
 - ・パウハウスの原寸の教育や、手で考え作る教育から、PC 迄幅広いデザイン教育を行っている。
 - ・産学共同研究を企業、自治体、他大学とも積極的に行っている。社会に広くある問題と向き合うことで複眼的な視野を養うことを考えている。
 - ・これら取り組みは、美術大学らしい環境デザイン分野へのアプローチが可能になると考えている。又、企業や自治体、他大学との交流の中で、プロデュース的なまとめ役としての役割を育成できるのではないかと考える。勿論、こうした能力は就職のための力になる。
 - ・上記のように広く社会にある問題と複眼的な見方を以って向き合う教育課程は、美術大学の特性を活かした環境デザイン分野の新しいアプローチを生み出すことが出来ると考えている。例えば屋上緑化が注目されたり、ランドスケープにおける表現力の必要性が、クローズアップされている。デザインを切り口に、造園や都市計画と言った領域に広げて行きたい。
 - ・環境デザインへの改組により、毎年こうした教育課程を終えた建築デザイナーを60人送り出せるようになったのは、社会との情勢を見るに良いタイミングだった。
 - ・実際に就職先は、乃村工芸社や丹青社、地方自治体、コンサルタント会社、ディベロッパーなど、バブル崩壊による影響は若干あるが、他相当な倍率を突破して就職をしている。
 - ・又、一般学生にも良い影響を与えるだろうキャリア入試を来年から行う。
 - ・こうした取り組みを受験生につなげるために、受験生のアプローチを考えている。
1. 「環境デザイン」という言葉を、受験生に分かりやすい言葉で伝える。
 2. 教育課程を明示して、4年間で何を学べるかを伝えている。
 3. それら説明を教員だけでなく学生に手伝って貰い、予備校周りを行っている。身近な先輩の話も聞くことで、受験の難関に足踏みするのではなく、入学してからの楽しさ、一緒に加わりたいという気持ちを持って貰えるようにアプローチしている。又、オ

ーブンキャンパスでのアピールも重視している。

（問題点）

- ・産学協同研究について、企業相手なので1年前から計画して、ということは難しい。学生の負担やスケジューリングの問題がある。

（その他、改善案など）

- ・産学協同研究について環境デザインでは単位になるが、他学科が参加した際、単位は他学科の判断に任せることになる。全学的に単位の仕組みを考えないと、産学協同研究は上手く行かないと思う。スケールのこともあるので、新しいシステムを考える必要があると思う。
- ・大学院に力をいれたい。家具制作・デザイン、環境デザイン、産学協同プロジェクトの3つの柱で、6年生教育を考えていかなくては行けない。そのためにも、学内からの進学率を高めたい。大学院も産学協同を広め、社会との関わりの中で、複眼的な視野を育成するように一層の努力をしたい。
- ・企画広報部とも協力して、こうした取り組みを取上げて欲しい。

情報デザイン

- ・日時：2004.6.30 16:15～17:15
- ・場所：情報デザイン研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
久保田教授、須永教授、森協助教授
- ・筆記：総務・石井

現状の報告

開設時の4年間を第1期として、2002年度以降を第2期と位置付けている。第1期から2期への変化の要因として、情報デザインの領域がファインアートまで広がってきたこと、多人数（120名）教育の問題が出てきたこと、が挙げられる。このため、専門性の整理と確立、コース制による人数の適正化を行った。コースをデザインと芸術に分け、各コース3スタジオ、計6スタジオで全体を構成している。第2期からはコース別入試も行われている。

評価と課題

（良い点）

- ・最近の新生は、確実に情報デザインの中身を知って入って来ている。
- ・センター試験の利用など複数入試制度により、人文や理数系に強い学生も入学して来ている。お互いの能力をシェアして授業をやっている（理数系が得意な学生がプログラムを書き、美術系が絵を描くことで作品づくりにおいて共同しているなど）
- ・編入学生が優秀で他の学生に非常に良い影響を与えている。
- ・産官学共同を通して他学科との交流が深まってきた（東京工大・GD、明治大・ベンツ・PD、江戸川区・ED）。又、他大学との実験授業も行っている（東大情報学環・水越伸）
- ・文部科学省内でも、メディア芸術という言葉が認知されて来たようだ。学生がメディア芸術祭で優勝したこともあり、情報デザインの評価も高い。情報デザイン学科がメディア芸術という分野の成果や目標を示す社会的役割を担う段階まで来ている。
- ・インターンシップなど、企業からの申し出が多い（今年度はシーメンスなど海外企業からの打診もある）。又、デザインコースでは、インターフェイスやユーザビリティなど専門性に対する社会的なニーズが隆盛である為、インダストリアル領域への就職が広がって来ている（ソニー、日立、東芝、パイオニア、トヨタ、デンソー、クラリオン、パナソニックなど）
- 一方、WEBデザインなどのビジネスが個人やSOHOによる形態に世の中が変わって来ている。その流れを受け、芸術コースでは個人で独立することを前提に小さなWEBデザインの会社に就職しているケースも多い。

（問題点）

- ・ここ数年、教育カリキュラムと組織の改革を行ってきたので、どうしても内向きになってしまった。社会にメッセージを伝える必要が

あると感じている。フライヤーなど広報をさらに充実させ、教育研究の内容を外に伝えていきたい。

- ・2期以降、設置科目を大きくりに変更した。社会情勢へのカリキュラムの適応度が増したが、英語など細かい知識やスキルなどの提供のバラツキが授業ごとで目立ってきた。

（その他、改善案など）

- ・PCは安くなったが、ハイエンドの映像・音響機器は依然安くない。地上波デジタルの時代を見越すと、ハイビジョンレベルに耐えうるハイエンド機器を扱える人材が必ず必要になってくる。そうした業界に人材を送り込むチャンスだ。ハイエンドの映像・音響機器の整備と、それに対応した技術職員が必要だ。
- ・ファイン系の学科でもメディアアートの分野に取り組んでいる。学科改編や制度ではなく、何らかの学内で共同するプログラムがあると良いと思う。
- ・コンピュータとネットワークの充実、それらのハード、ソフトウェアの整備が、情報デザイン学科の教育基盤になっている。その特徴を維持し、有効に運営するために人的な負荷がかかっている。スタッフの増員を不可欠な課題と考えている。
- ・大学院を充実させたい。現在の大学院では各学科バラバラでやってるので魅力に乏しい。

芸術

- ・日時：2004.6.30 14:45～15:45
- ・場所：芸術学科会議室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
海老塚教授、建畠教授、西嶋教授、村山教授
筆記：総務・石井

現状の報告

キュレーターやエディターなど、媒介者として芸術学に関わることを基本として来たが、うまくアピール出来ていない欠点があった。美大の芸術学科だからこそ、を考え大幅にやり方を変えた。

評価と課題

（良い点）

- ・大幅なカリキュラム変更

1. コース制を廃止し、ブラックティス、セオリー系に分け、3、4年では両方取らないといけない。企画と研究両面がカリキュラムに反映される。
2. 創造、鑑賞、研究、企画をメインとする。他学科に協力して貰い、制作の現場に触れること、オフ・キャンパスで質の高い催しに触れて、感動体験を学ぶこと、「プロデュースの現在」の授業で一線で活躍する卒業生と触れ、意欲を出させ、さらには就職につながるようにしたい。

- ・コース制を廃したので、共通教育の科目の履修が可能になり、カリキュラムが整理された。
- ・フライヤーを作成して、上記四位一体のカリキュラムと卒業生の活躍を伝える。
- ・進学相談会では2日間、時間をとって詳しい説明をする。WEBにつなぎ、アーカイブの紹介もし、受験生にアピールする。
- ・様々なアーカイブにより、教育のバックアップを行っている。

<http://archive.tamabi.ac.jp/issues/>

<http://bunko.tamabi.ac.jp/bunko/preface.htm>

アーカイブへのアクセスも多く、社会貢献の役割もある。全学的にアーカイブをどのようなものにして行くのか、という議論も必要ではあるが。

（問題点）

- ・大学院生は、外部進学者と内部進学者が半々くらい。「現代美術を研究するなら多摩美」として、外部に知られているのは良いが、内部進学者を増やしていきたい。

- ・学部の改革で今年は、大学院まで手が回らなかった。大学院でプロデュース系もやるのか、研究に特化するのか、結論がまだ出ていない。大学院の問題について、議論の俎上にのせる場の必要を感じる。

（その他、改善案など）

- ・実践的な語学教育の必要性を感じている。共通教育とも話し合いたい。
- ・専任教員6名、時代に対応した任期制 or 特例勤務の体制を基本と考えている。理解願いたい。

共通教育（美術学部）

・日 時：2004.6.28 11:15 ~ 12:15

・場 所：八王子本館理事長室

・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長

勝間教授、佐原教授、大道教授、西谷教授、秦教授、バーナード教授、高橋（周）助教授

筆記：総務・石井

現状の報告

基本学理の補強、知識の細分化に対応した総合的知識の習得を目的にしている。そのために、カリキュラムの廃止、統合、新設を行い、現在も引き続きカリキュラム改革を行っている。

評価と課題

（良い点）

- ・西洋美術、西洋哲学など、日本の大学では扱う科目がヨーロッパ中心になりがち。多様な文化を知り、幅広い知識を習得するという共通教育の本来の意義に立ち返り、アメリカ、イスラム、アジア文化圏の科目を設置した。
- 1. 中国語は2年前に、韓国語は今年から。履修者も40~60人と評判が良い。
- 2. イスラム文化圏の科目は、音楽（松田嘉先生）だけだった、イスラム文化の科目を新設した（非常勤）、100名ほどの履修者がり、評判が良い。

（問題点）

- ・各学科独自で実践的英語講座の設置と、語学の必要履修単位を減らしたことで、1年次しか語学をやらなくなってしまった。語学教育ということで考えると残念だ。カルチャーセンターではなく、全人教育を意識したい。

（その他、改善案など）

- ・必修科目の履修者数に偏りが生じている。学生が求めているものを考えていくことと、そのアレンジが必要かも知れない。
- ・各学科からの必修科目に指定が横並びになっている。各学科が個性づけをして必修指定をした方がカリキュラムを組みやすいところもある。
- ・自然科学の分野が手薄になっていると感じる。もの造りをする美大生にとって、自然科学は学生にとって非常に重要だ。
- ・人文とか自然科学という枠組みに囚われず、様々なジャンルが融合した実験的な取り組みを行い、新しい切り口を提示するののも一つの家だと思う。
- ・共通教育と各学科の壁がある。全学的に専門と共通教育が話しあえる場があっても良い。
- ・上野毛との協力体制も検討課題の一つだ。

造形

- ・日時：2004.6.19 13:30～14:30
- ・場所：造形学科研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、米倉学部長
高橋教授、田中教授、北條教授、松下助教授
筆記：総務・石井

現状の報告

- ・日本画と油画でクロスオーバーの授業を行っている。
- ・平面表現を中心として、インスタレーション、立体などは物理的、人的要素を考慮して行っていない。
- ・社会人の制作意欲は目を見張るものがあり、成果を上げている。

評価と課題

(良い点)

- ・クロスオーバーの授業を行いカリキュラムが多様化している。新入生も大学案内等で情報を収集し、色々なことをやりたいという希望をもって入学してくる。クロスオーバーの授業は、学生にとっても選択肢が広がり良いアピールになっている。
- ・社会人は、非常に学習意欲が高い。入学時の基礎力不足を自覚しているからだろう。4年間でかなりの成長が見られる。大学院に進学するのも社会人が多い。
- ・五美大の参加は良かった。日本画、油画が混在しているのは他大学には無い特徴だ。
- ・作家養成の一環としてギャラリーヨコハマ作品展など、授業に取り入れてる。大学院生などはその意識が強い。

(問題点)

- ・クロスオーバーの授業は選択必修科目であるが、夜間部ということで単位取得上の問題から、ほぼ全員に授業を受けさせている。慌しく科目をこなさないといけないので、対象物にじっくりと向き合うということが難しい。時間的制約がどうしても出てくる。
- ・カリキュラムの多様化により、授業準備に手間が掛かる。助手・副手の負担が大きくなった。
- ・制作スペースの問題がある。
2号館は天井が低いので、距離が取れない。/3年生から大作を描くので、1、2年生のテンペラ、フレスコなどは50人規模であるのに小部屋しか使えない。廊下など外でやらざるを得ない。/80号を描かせたいが、スペースのもんだいで50号で止めている。
/版画の部屋は、生涯学習との兼ね合いもあり4月しか使えない。/日本画、油画の比率が年によって違うが、部屋割りは固定なので比率に偏りがでると運営が大変である。
- ・学生にとって経済的な問題がある。4年間を通して、独自の技法が出始めたときに経済的理由から、大学院進学を諦める場合が多い。トップクラスが抜けてしまうのは、非常に残念。大学院含め、6年間でやっと独自の技法を育てることができると考えている。その点、社会人は経済的バックグラウンドがあるのか、大学院進学はほとんどが社会人である。

(その他、改善案など)

- ・学生にとって、施設や制作環境を良いものにしてあげたい。
- ・メンタル面で学生相談室に行っている学生が多いようだ。研究室で激励のつもりで声をかけて逆効果になることもある。プライベートの問題もあるが、学生相談室と連絡を取り合いたい。又、メンタル面に問題を抱える学生への対処方法を教えて欲しい。専門の先生による講習会などがあると良い。
- ・芸大が1週間くらい入試日程を遅らせたため、受験者が減ったようだ。芸大と造形学科の試験日程が近かったため、芸大の試験を優先されたようだ。
- ・学生数を定員のみにするれば物理的な問題は軽減するが、基本的な問題点は現在の箱ではやはり困難を来たす状況である。

デザイン

- ・日 時：2004.6.19 14:45～15:45
- ・場 所：デザイン準備室(1-108)
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、米倉学部長
猪股教授、太田教授、山中教授、高味助教授、武正助教授、西岡助教授、植村講師
筆記：総務・石井

現状の報告

- ・コミュニケーションデザインを軸に、分野の垣根をはずした複合デザインを目指している。デザインを通して、社会とどう向き合っていくかを大切にしている。

評価と課題

(良い点)

- ・八王子と同じ分野のオンパレードという指摘を学長に頂いたが、逆にそれが良かった。各分野が別々の学科ということではなく、デザイン学科という1学科で行っているため、異分野交流が可能である。複合デザインの時代に適っている。
- ・その取り組みとして、星座ゼミという形のゼミを行っている。学生も教員も異分野の人材が一つのゼミを通して交流することで面白さが出ている。
- ・デザインの社会的役割と可能性というテーマでやって来たが、時代に対応したデザインという概念をリードする取り組みを行っているという自信がある。
- ・blogを活用した授業など、社会との接点を意識している。E-learningの需要は大きいと思う。実際にblog授業については、ネット系のライターなどからの問い合わせがあった。(http://blog.goo.ne.jp/04s2network)
- ・デザイン分野の社会人は概して優秀。豊富なキャリアが良いのだと思う。今の学生の一番問題点は、社会経験が少ないことであり、複雑なことになると対応できなくなる。その意味で社会人は他の学生に良い影響を与えている。
- ・「'97・'99」の時のPCルームの管理に手が掛かるという問題は、解消した。

(問題点)

- ・今の学生は、プロのデザイナーになりたいと言う希望が少ないようだ。クリエイティブな環境に身を置ければ良いと考えているようだ。裾野は広がったが、浅く広くという形で対応している。それをどう捉えて対応すべきかを考えると、良い悪いは別にして難しい時代であると思う。

(その他、改善案など)

- ・社会人は既に一部単位を取得済みという場合が多い。取得済み単位への経済的バックアップが必要だと思う。
- ・広報を適切に行いPRを充実させたい。
企画広報部のみでの広報活動ではなく、実際に現場を知っている教員が機動的に広報活動を行いたい。/企画広報部とともに高校、予備校まわりもやりたい。/教育成果をビジュアル的に分かり易くしたPR方法を考えたい。
- ・広報活動を行なうための、学科独自の予算と権限を与えて欲しい。勿論、結果が出なければ、翌年に反映させて貰って良い(全体的な縛りがあるのは当然だが、現状の100万円では難しい)
- ・他大学とのつながりを持ってないか?例えば、東大とか早稲田などトップの大学との単位互換などによって、相互に別の分野の勉強ができるシステムがあると良い。都内立地や夜間授業というのは、メリットになる。又、そこで生まれた新しい発見が大学院へつながる可能性もあると思う。
- ・エントランスや食堂などにテコ入れできないか?社会人学生など、学費に対する意識も高いので、美観などに配慮して欲しい。

映像演劇

- ・日時：2004.6.19 16:15～17:15
- ・場所：映像演劇学科研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、米倉学部長
鈴木教授、萩原教授、福島教授、石井助教授、加納助教授、河原助教授
筆記：総務・石井

現状の報告

他大学や美術学部と競合しない学科であると思っている。学科内を映像と演劇の2分野に分けず、「表現」ということにこだわって、基礎を学ばせることを重視している。

評価と課題

(良い点)

- ・受験者の減少率が他学科より少ない。他と競合しない点と、映像と演劇というように区別を設けず「表現」にこだわっている成果だと思う。予備校などでは両方やれるという伝わり方。
- ・設置から15年経ち、卒業生が活躍し始めている。

(問題点)

- ・施設のスペース、機材の老朽化に問題がある。絶対的に不足状態。
- ・アニメーション、ゲームなどのデジタル分野が上手くない。その分野の専任教員がないので対応できていない。今後の問題として、急ぎ立案に入った。
- ・社会人の数が中途半端で上手く対応できていない。一般学生と一緒に授業をするのは難しい。一般学生向けに基礎を重視することになるからだ。

(その他、改善案など)

- ・PCや機材の入れ替え、機材室や工作室をプレハブで良いから作って欲しい。
- ・写真スタジオ、映像スタジオ、講堂などメディアセンターに代って直接管理で柔軟に使いたい。
- ・魅力ある学科を目指して、システムメディア、メディアアートの分野に力を入れたい。旬の人材を特例勤務で呼びたい。
- ・受験動機となる卒業生の活躍を引き出すために、卒業生支援を行いたい。昼間のスタジオ利用などの有効活用をしたい。
- ・例えば、演劇関係者への稽古場の貸し出しを行い、その代わりに学生の出入りを自由にするといった提案もある。
- ・上野毛を開かれた場所にして、何かができる「場」があるということをアピールしたい。劇場でも試写室でも何でも良い。昼夜問わず、何かがあるという場所をアピールできないか？このために「劇表現工学研究所(仮称)」を併設したい。
- ・これらを解決するために、研究室では3つの方策を考えた。
 1. 授業を変える+入試を変える
 - * 自己推薦入試の導入
 - * 昼夜開講型への大胆なモデル転換
 2. 科研費のとれる学科へ(システムメディア系の立ち上げ)
 - * 専任教員の交代補充と非常勤講師および助手の増員を含めて中期戦略を。
 - * 劇表現工学研究所の立ち上げ
 3. メディアセンターの役割を兼務+教育環境の整備
 - * 講堂、映像スタジオ、写真スタジオ等の運用管理
 - * 教室の確保+機材機器類の更新+学生環境の整備
- ・これらを行うために、コスト面での対応として入学者100名、総数400名の学科を目指したい。

共通教育（造形表現学部）

- ・日時：2004.6.19 11:15～12:15
- ・場所：本館会議室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、米倉学部長
伊藤教授、小穴教授、中村教授、樋口教授
筆記：総務・石井

現状の報告

- ・全ての学生を対象としている共通教育は、幅広く人間考察することを重視している。教員数も少ないので、どの分野に特化するかが課題であり、カリキュラム改革に取り組んでいる。

評価と課題

（良い点）

- ・どうしてもマスプロになりがちな共通教育では、ゼミ形式の導入や講義形態などの改革を行いつつある（その他、改善案で詳述）、学生の要望に応えられるような対策を一つづつ積み上げている。

（問題点）

- ・講義形式だとその積りではやっていないが、一方的に情報を与えテストを行うということになりがち。講義形式の枠内で様ざま取り組んでいるが、共通教育はマスプロになりがちな状況である。
- ・夜間なので、限られた時間で単位を取得させることに重点を置きがちになる。そろそろ次の段階を目指して良いと考えている。
- ・技術的には、演習2単位、講義4単位であるため、語学は労多くして2単位ということになってしまう。夜間部なので時間も限られており残念だ。
- ・カリキュラムに占める語学の割合が多いので、様ざまな講義を増やすという意味で語学を選択科目にした。その利点もあるが、国際化の時代であるし、語学を好きになって欲しいという気持ちもあり複雑だ。

（その他、改善案など）

- ・マスプロ教育の弊害を解消するため、カリキュラム改革を行った。
少人数ゼミを取り入れた。/ アジアの一員としてアジア諸国語を教える。来年から韓国語の講座を開く。/ 美術大学の特性、夜間学部という生活環境から、心の健康に問題を抱える学生が少なくない。チームスポーツや太極拳など呼吸運動を取り入れたスポーツ科目を増やし、学生の心の健康に配慮した。/ 1つのテーマを複数教員によって立体的に捉える授業を検討している。/ 実技系や外部の者との連携授業を検討している。
- ・学生の資質としては、真面目でおとなしい学生が多い。講義形式では、おとなしい学生は中々発言しない。少人数ゼミによって、おとなしい学生でも発言の機会が増え、自分の考えをきちんと言葉にするという大切なことが望めるのではないか？
- ・少人数ゼミの導入により、教員も学生から教わることがあるだろう。その効果を期待している。
- ・学部長から社会人だけの講座の提案を受けたが、そのメリット、デメリットを考えてみる価値があると思う。やってみて新しい発見があるかも知れない。
- ・教職については、八王子と連携できるように検討している。
- ・社会人にとって18:00～の授業というのは、間に合うか、どうか時間的にキツイ。
- ・留学できる大学が受験生にとってアピールになるので、語学能力は重要になってくると思う。講座数は減らしたが、質は維持できるようにしている。
- ・受験者数のことを考えると、入るのは簡単だが出るのは難しいというように門戸を広げていくべきだと思っている。
- ・受験生にとっては、就職が大切だ。人材育成のコンセプトを学部としてどのように出していくかが課題だと思う。そのコンセプトをハッキリ出して頂ければ、カリキュラムなどへの反映も議論していけるだろう。学部として議論できる場があれば良いと思う。

大学院

- ・日 時：2004.6.24 16:15～17:15
- ・場 所：大学院研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
島尾教授、本江教授、小島助手
筆記：総務・石井

（議事要旨）

- ・ファイン系とデザイン系が融合する形にしたい。大学院が横のつながりを推進して、大学にとっての頭脳的役割を果たしたい。
- ・2003年度までは、課程が独立して運営されていたが、学部・修士・博士とつなぎ固めて行きたい。
- ・そのための環境を作る必要も感じている。

美術館

- ・日 時：2004.6.26 14:00～15:00
- ・場 所：美術館マルチメディアシアター
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
仙仁事務室長、小林主任
筆記：総務・石井

現状の報告

山邊前館長、宮崎館長の基本コンセプトである「良いものを展示すること、それによる刺激」という意識を前提に運営して来た。八王子時代は、キャンパスライフの中での日常的なアートゾーンとして考えてきた。多摩センターへ移転してからは、同時に社会に向けた活動をという考え方を併せ持つようになっている。多摩市や八王子市からも好意的に捉えて貰っている。

評価と課題

（良い点）

- ・大学の美術館であることから研究活動と業績を基盤として、特に大学力としての共同研究とのリンクを考えている。「構成主義ポスターの研究」や「リヒャルト・パウル・ローゼ」展など、共同研究から始まったものだ。大学の附属美術館らしい多様な特別展を開くことが可能であり、大学美術館の存在価値と社会性につながっている。入館者数を上げていくという課題はあるものの、マスコミなどには概ね好評を得ており、大学の附属美術館としての方向性は認知されている。
- ・ファインアート系だけでなく、デザイン系も積極的に取り上げ、文化発信のキー局としての役割を考えてみたい。高木教授の退職記念展などは、漆作家の展覧会は例がなく、スイス外務省の文化担当者からの是非扱ってみたいという反応があった。
- ・竹尾のポスター展など特色のある展示をやったお陰で、多様な美術を扱う姿勢が注目されるようになった。「リヒャルト・パウル・ローゼ」展が巡回出来たのもその結果だと思う。
- ・これからは本学同様の施設を持っている他大学ともリンクし、社会に対して、大学からの発信機能を高めて行く可能性も見えている。

（問題点）

- ・所蔵品目録の整備と収蔵庫の確保が必要である。収蔵庫などの管理体制を一層整え、アピールすれば寄贈などの申し出も増えると考えている。

（その他、改善案など）

- ・学生や教員の作品を見たいと言う声もある。八王子時代には「50人の目展」、「校友会展」を行った。昨年度は「博士課程展」を行った。学生や教員の作品についても「社会性」ということを考慮して考えてみたい。
- ・「今井兼次展」など建築系の展覧会も積極的にやって行きたい。

- ・作品コレクションについては、本学と深い関わりを持つ世界的作家と早いうちからコンタクトを取って行きたい。
- ・収蔵作品の整理や研究などを大学院の授業や研究と結びつけることで、共同研究や芸術学科のアーカイブなど特色ある研究を導き出し、大学力のボトムアップにつなげたい。
- ・カリキュラム化することで学生の利用を増やすことが課題（授業での見学利用、シアター・多目的室などの施設利用など）
- ・教員や学生に年間一定期間開放して欲しいという要望があり、その課題が残る。

図書館

- ・日 時：2004.6.28 10:00～11:00
- ・場 所：八王子本館理事長室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
峯村館長、筒井事務課長
筆記：総務・石井

現状の報告

約 11 万冊の蔵書がある。2002 年以降、図書館電算システムを導入してデータベースによる蔵書管理を始めた。選書に対する基本的な考え方として、小説や文庫本などの一般書籍は公立図書館に任せて、美術大学の特色を出せるような蔵書を意識している。図書の整理については、PC 検索可能なものが、約 85% であり、実際に利用者が利用可能な状態にあるものは、70% 程であろうかと思う。利用者が利用可能な蔵書数を増やしていく課題がある。

スペースの問題もあり、学生のニーズに応えきれていない部分もあるのが、新図書館の建設を機に学生のニーズに応えられるように検討している最中である。

評価と課題

（良い点）

- ・相模原市の公立図書館との提携を行った。橋本の図書館の学生利用は非常に高いようだ。学生の利便性が高まった。小説や文庫などの一般書籍は提携の公立図書館で、美術書など美大の特色を生かした蔵書は本学図書館で、という住み分けが上手く行っている。本学の特色を出しつつ、小説や文庫などの一般書籍を効率的にカバーできるというメリットがある。又、一般の方に対しては、公立図書館では蔵書数が少ない美術書の閲覧機会を増やすという意味で社会貢献の意味もあろうかと思う。
- ・図書館電算システムを導入して、磁気カードによる貸し出しに変えたので、随分手間が省けるようになった。

（問題点）

- ・研究室の図書は図書館でデータ管理を行い、現物は研究室で管理している。一部の研究室では使用頻度が高い図書は、研究室で管理すれば利便性が高いが、その分、コスト高（場所、人、時間など）になってしまう。
- ・スペースの問題があって閲覧場所の確保が出来ない。開架図書を増やしたいが難しい。
- ・ディテクションが無いため、所持品を書庫に持ち込めない。

（その他、改善案など）

- ・新図書館へ移行する際に、以下のような検討事項がある。
- 1. 映像資料をどう扱うかが問題。MC と役割分担を新図書館構想でハッキリしておく必要がある。MC との重複、収蔵スペースの問題が出てくる。中途半端なものにならないように検討しないと。（*メディアテークの話があるが、各学科やMC でコンテンツ制作機能は請け負うべき。新図書館の面積を考えると、図書をメインにするべきだろう。映像関係は、あくまでも収集と活用が基本。サーバを別に置く手もある。書籍と映像（デジタル）の性格の違いを良く考えて、新図書館のコンセプトを固めて欲しい：学長談）
- 2. 開架図書を増やし、積極的に学生に使って貰いたい。その為にはディテクションの問題をクリアする必要がある。
- 3. 開架書庫に閲覧場所を設けるために、ゆったりとした場所を取るなどの検討が必要。
- 4. 開館時間の延長をするなら、ゾーニングの問題、人の手当の問題が出てくる。人的問題は、学生アルバイトの利用などが、コスト

と教育効果の両面から有望であると思う。その場合、カギの問題など、ゾーニングが一層重要になるだろう。

5. 研究室の蔵書を図書館管理とした場合、コレクションの意図含め、上手く管理できるか検討の余地がある。共通の要素を持つ図書は、図書館で管理していく方向が良いとは思いますが、そうした管理の問題があるので難しい話でもある。
- ・蔵書数の比較では遅れていることは事実。蔵書数を増やすのは、コツコツとやって行かないといけない。蔵書数で宣伝効果を上げるのは、早急には難しい。運営方法で特色を出していきたい。
 - ・研究室設置の図書を図書館が一括して集めアーカイブ機能を果たすことを考えていかななくてはならない。
 - ・寄贈資料を利用して、各学科が研究活動を行ったり、大学院生を研究活動に参加させていく、という形があっても良い。
 - ・かつては新書、文庫はハードカバーの縮刷版という位置づけであった。最近は、新書、文庫のみの重要な書籍も増えてきた。新書、文庫等の扱いも見直す必要があるだろう。

メディアセンター

- ・日 時：2004.6.28 14:45～15:45
- ・場 所：メディアセンター会議室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長
石田所長、野澤事務室長、駒形、肥沼、三浦、林、長谷川、村穂技術職員
- 筆記：総務・石井

現状の報告

MC 運営委員会で運営を決定している。各センターごとに小委員会を設け、各センターの詳細事項をフォローしている。

評価と課題

（良い点・問題点）

- ・情報センター
労働力の投下効率の悪い旧サービスの廃止、情報の告知、アップルトークのブロードキャスト制御の問題については、サーバ更新により問題解決を行った。小委員会が、機能しづらくなったのが課題。
- ・工作センター
当面、スペースなどの物理的障害をクリアするには、授業計画の見直しが必要と思う。Web を有効に利用し、学生の利便性を上げていくのが課題。瀬田文教サミットなど、社会貢献活動も行っている。
- ・映像センター
施設整備の時に、事前打合せで回避できる問題が多い。
- ・研究センター
アーカイブ 産官学共同研究へシフトして行く。授業と産官学共同研究が面白い事例であると、経済産業省の担当官にも言われた。著作権などの契約業務に対応するマンパワーが足りない。
- ・写真センター
グラフィックによる利用中心から、全学対象の講習会利用にシフトした。講習会は応募も多く、利用まちが出るほど好評。暗室利用については、グラフィックの学生がまだ多く、他学科の学生による自由使用が押し出される結果になってしまっているのが課題。

（その他、改善案など）

- ・委員会のあり方を考え直す時期に来ている。（全センタ）
- ・ネットワークに限らず、各種システムを扱う IT 委員会など検討できないか？（MC の機能とは別次元の話であるが。）（情報センタ）
- ・サービスを高めるためには、個人認証の一元化が必要になってくる。ネットワークとかではなく、全学的な問題だ。現状のシステムのあり方では、非常にコストリー（大学の財政、学生の手間でも）（情報センタ）
- ・それらを統合する組織が必要。（石田所長）
- ・産官学共同研究や、社会との関わりで独自の技術支援ができればと思う。（工作センタ）
- ・研究助成のコーディネート役をやりたい。法律的な事務に対処できるマンパワーの手当が必要だ。ファインアート系でも産官学共同

X . 資料（ヒアリング）

研究を行っている（彫刻の更埴市など）、ファインアート系の埋もれた産官学共同研究にスポットを当てる必要がある。

（研究センタ）

授業評価アンケートの目的

体系的な知識がどこかに在り、それを空の頭の中に詰め込んで行くという教育を本学では行なわない。

創造の力は、学生自身が、学びの環境から自分の意志をもって、同時に、教職員の提供するさまざまな活動に支えられて、内発的に育つものである。

授業料を払った分、あるいはそれ以上に、本学において「自分は学ぶことができた」と感じることであったかどうかを調査する。

アンケート内容

- 1 . 学年
- 2 . 性別
- 3 . 所属学部学科
- 4 . 質問内容

Q1:この授業で学んでいることは多いですか。

Q2:この授業を楽しんでいますか。

Q3:この授業は分かりやすいですか。

Q4:授業への出席などあなたのこの授業の参加度は高いですか。

Q5:あなたはこの授業を同じ学科の後輩に勧めますか。

実施方法

授業名を伏せて提出するA方式と、授業名を公開しその結果を教員個別に還元するB方式のどちらかを選択し、実施期間内に行う。一つの授業を複数の教員が行っている場合は、希望により、教員ごとの集計をする。

実施期間

2002年度

美術学部 2002年11月11日～2002年12月14日

造形表現学部 同 上

2003年度

・前期

美術学部 2003年6月23日～2003年7月12日

造形表現学部 同 上

・後期

美術学部 2003年11月25日～2004年1月10日

造形表現学部 2003年11月25日～2003年12月13日

アンケート実施率・回収率

14年度

15年度

アンケート実施率 ・全学 学部単位の明細			
	対象件数	実施件数	実施率
美術学部	586	450	77%
造形表現学部	142	126	89%
合計(全学)	728	576	79%

学部・実技系・講義系単位の明細				
	区分	対象件数	実施件数	実施率
美術学部	実技系	343	256	75%
	講義系	243	194	80%
造形表現学部	実技系	86	73	85%
	講義系	56	53	95%
合計(全学)	実技系	429	329	77%
	講義系	299	247	83%

アンケート実施率 ・全学 学部単位の明細			
	対象件数	実施件数	実施率
美術学部	726	543	75%
造形表現学部	163	130	80%
合計(全学)	889	673	76%

学部・実技系・講義系単位の明細				
	区分	対象件数	実施件数	実施率
美術学部	実技系	463	352	76%
	講義系	263	191	73%
造形表現学部	実技系	100	77	77%
	講義系	63	53	84%
合計(全学)	実技系	563	429	76%
	講義系	326	244	75%

アンケート回収率(実施授業のみ) ・全学 学部単位の明細			
	配布枚数	回収枚数	回収率
美術学部	26,017	12,083	46%
造形表現学部	7,282	3,968	54%
合計(全学)	33,299	16,051	48%

学部・実技系・講義系単位の明細				
	区分	配布枚数	回収枚数	回収率
美術学部	実技系	11,674	6,250	54%
	講義系	14,343	5,833	41%
造形表現学部	実技系	2,976	1,810	61%
	講義系	4,306	2,158	50%
合計(全学)	実技系	14,650	8,060	55%
	講義系	18,649	7,991	43%

アンケート回収率(実施授業のみ) ・全学 学部単位の明細			
	配布枚数	回収枚数	回収率
美術学部	30,691	15,817	52%
造形表現学部	6,746	4,069	60%
合計(全学)	37,437	19,886	53%

学部・実技系・講義系単位の明細				
	区分	配布枚数	回収枚数	回収率
美術学部	実技系	15,724	9,003	57%
	講義系	14,967	6,814	46%
造形表現学部	実技系	2,705	1,918	71%
	講義系	4,041	2,151	53%
合計(全学)	実技系	18,429	10,921	59%
	講義系	19,008	8,965	47%

アンケート対象授業における実施率は8割近くとなり、任意ではありましたが、教員の積極的な参加が目立ちました。また、回収方法は授業名を伏せるA方式と授業名を明らかにするB方式がありましたが、B方式が9割以上を占め、自分が学生にどのような評価を受けているかを知りたい教員が圧倒的でした。

アンケート実施授業に対するアンケート用紙回収率は、そのまま出席率と考えることができます。50%という出席率が全国平均で高いか低いかはその統計資料がないのでなんとも言えませんが、14年度・15年度とも「参加度は高いか」という質問に対して65%前後の学生が「強くそう思う」「そう思う」と回答していることから、出席する学生がある程度固定化されているとみることができます。

学年別アンケート回収率 (実施授業のみ)

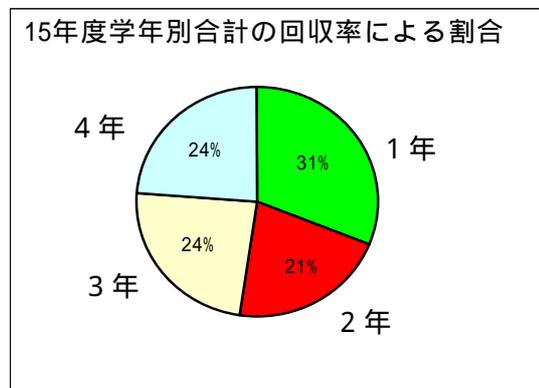
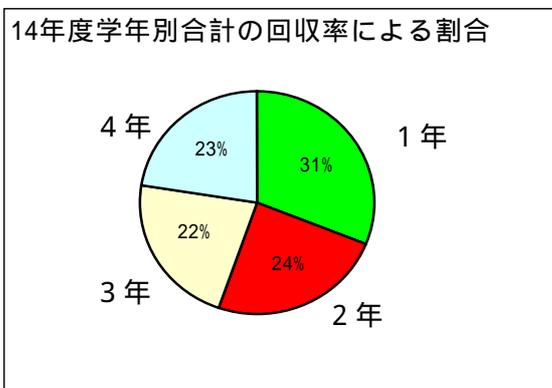
・ 学年別

14年度

全学				
学年	区分	配布枚数	回収枚数	回収率
1年	実技系	3,971	2,494	63%
	講義系	7,149	3,864	54%
	合計	11,120	6,358	57%
2年	実技系	4,774	2,427	51%
	講義系	5,840	2,276	39%
	合計	10,614	4,703	44%
3年	実技系	4,390	2,174	50%
	講義系	3,574	1,039	29%
	合計	7,964	3,213	40%
4年	実技系	1,515	831	55%
	講義系	2,086	659	32%
	合計	3,601	1,490	41%
その他	実技系		2	
	講義系		63	
	合計		65	
不明	実技系		132	
	講義系		90	
	合計		222	
合計		33,299	16,051	48%

15年度

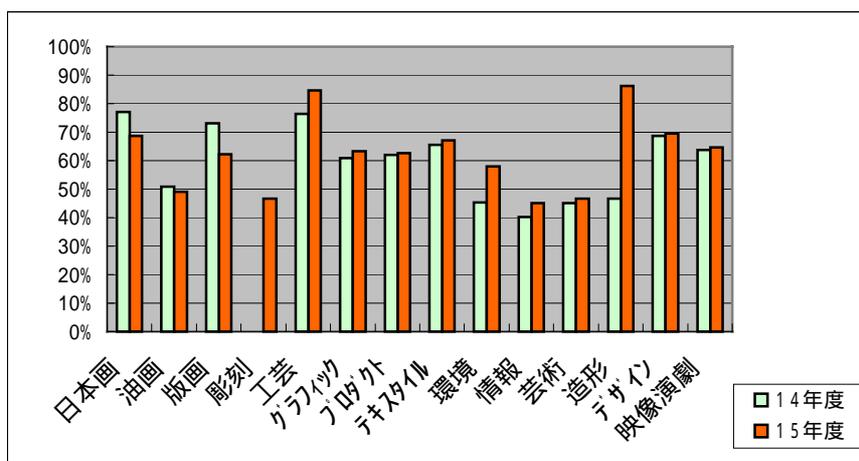
全学				
学年	区分	配布枚数	回収枚数	回収率
1年	実技系	4,793	3,234	67%
	講義系	7,386	4,600	62%
	合計	12,179	7,834	64%
2年	実技系	7,392	3,396	46%
	講義系	6,369	2,615	41%
	合計	13,761	6,011	44%
3年	実技系	4,294	2,810	65%
	講義系	3,316	946	29%
	合計	7,610	3,756	49%
4年	実技系	2,023	1,311	65%
	講義系	1,864	620	33%
	合計	3,887	1,931	50%
その他	実技系		9	
	講義系		65	
	合計		74	
不明	実技系		161	
	講義系		119	
	合計		280	
合計		37,437	19,886	53%



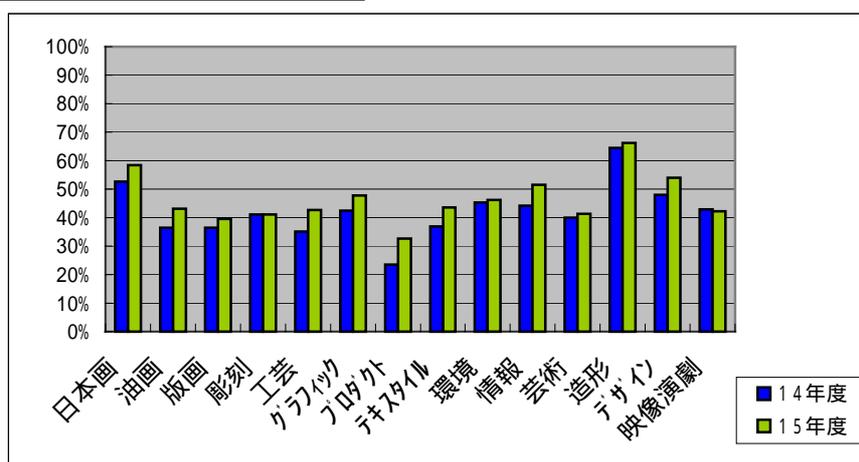
アンケートの回収率は、授業の出席率に置き換えて考えることができます。学年別の集計をみると、1年の出席率が高く、他の学年はほぼ同じという結果がでています。

学科別アンケート回収率

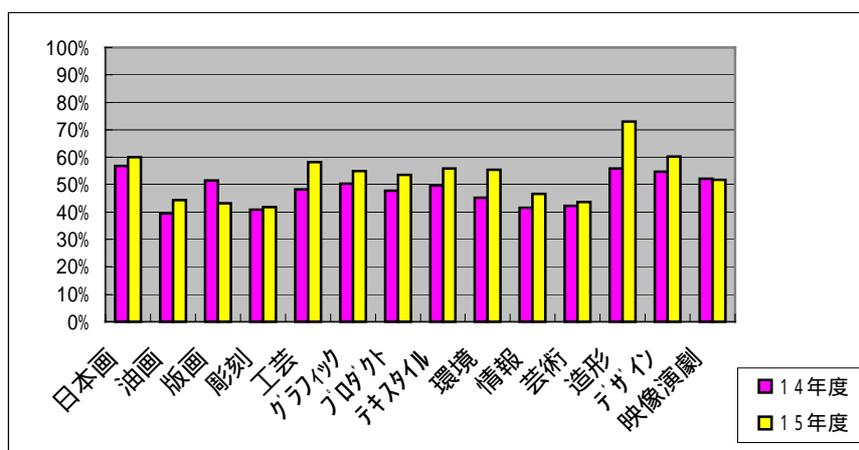
アンケート回収率(実技)



アンケート回収率(講義)



アンケート回収率(実技・講義合計)

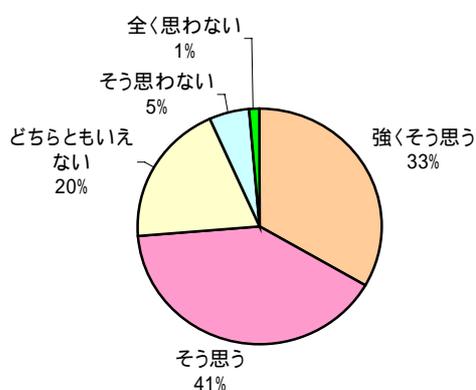


実技系の平均回収率が50%台、講義系は40%台で、実技系の授業のほうが出席率が高いという結果がでています。
アンケート回収率では、実技系と講義系にわけたとき、学科により若干のバラつきがみられます。

・ 14年度全体集計

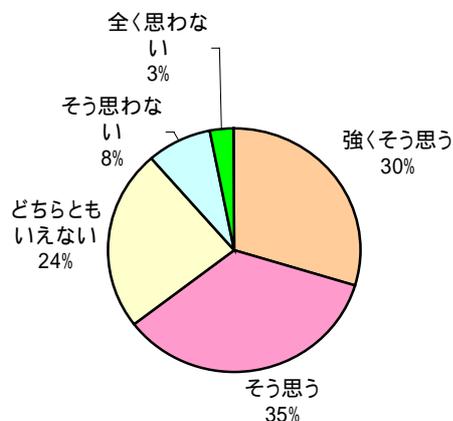
授業評価項目の単純集計（Q1）

この授業で学んでいることは多いですか



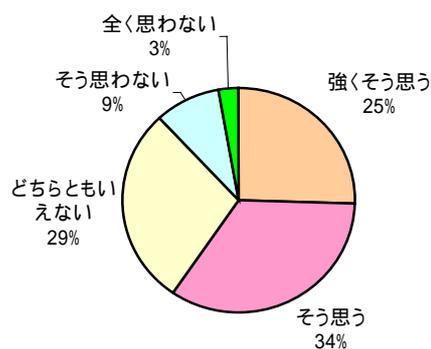
授業評価項目の単純集計（Q2）

この授業を楽しんでいますか



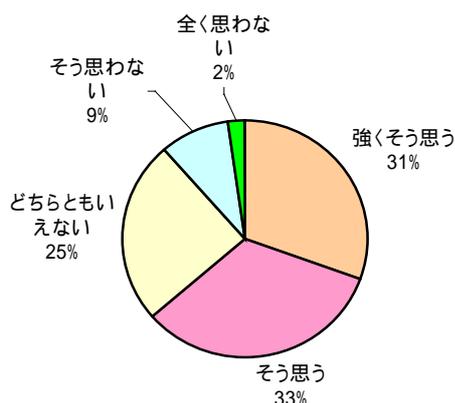
授業評価項目の単純集計（Q3）

この授業は分かりやすいですか



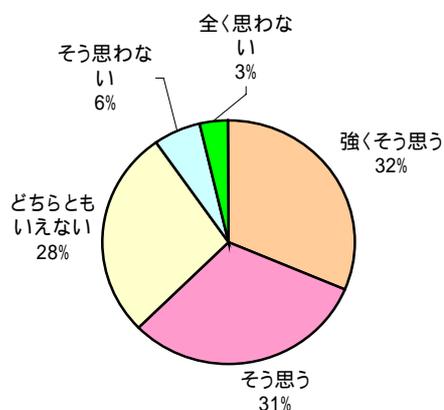
授業評価項目の単純集計（Q4）

授業への参加などあなたのこの授業の参加度は高いですか



授業評価項目の単純集計（Q5）

あなたはこの授業を同じ学科の後輩に勧めますか

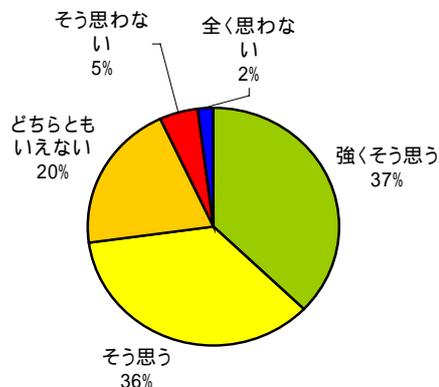


各質問を個別に調べると、担当授業が全て評価の高い教員もいますが、同じ教員でも授業によって評価が大きく異なるものがありました。これは授業内容そのものに学生の関心があるかないかによるものと思われます。例えば自分は履修したくないが、資格をとるために仕方なく履修しているというような場合は、評価が低くなる傾向があります。

・15年度全体集計

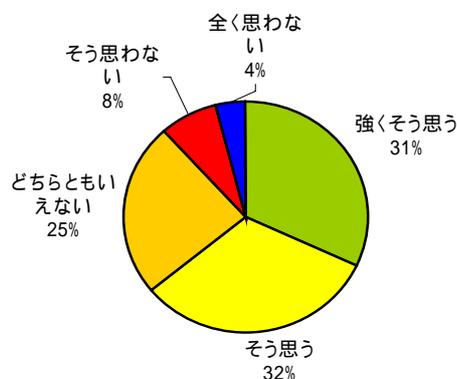
授業評価項目の単純集計（Q1）

この授業で学んでいることは多いですか



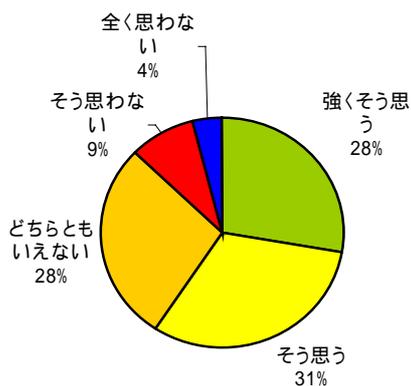
授業評価項目の単純集計（Q2）

この授業を楽しんでいますか



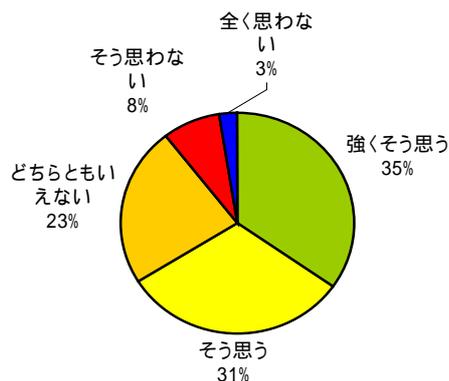
授業評価項目の単純集計（Q3）

この授業は分かりやすいですか



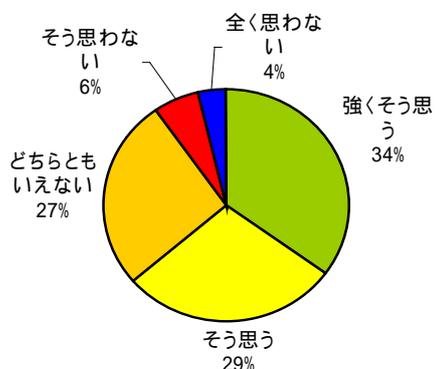
授業評価項目の単純集計（Q4）

授業への参加などあなたのこの授業の参加度は高いですか



授業評価項目の単純集計（Q5）

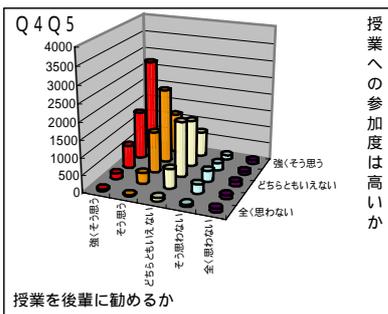
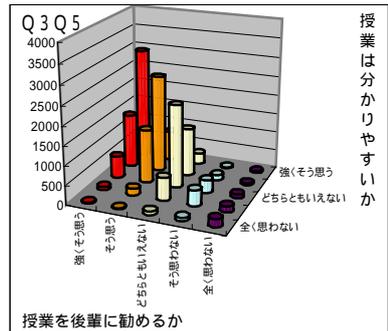
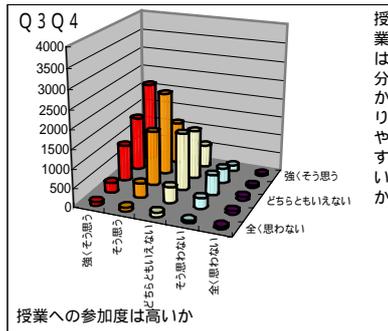
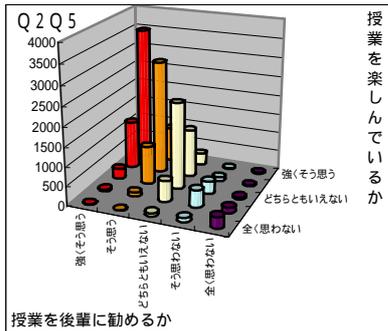
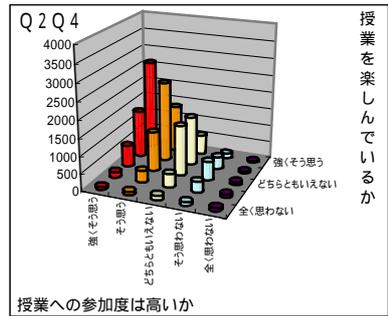
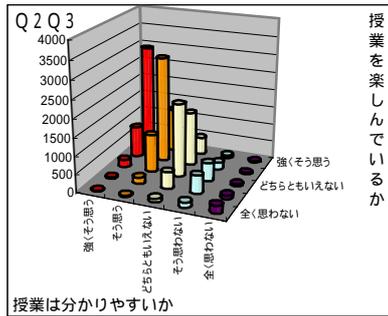
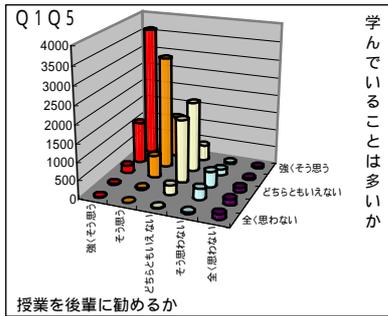
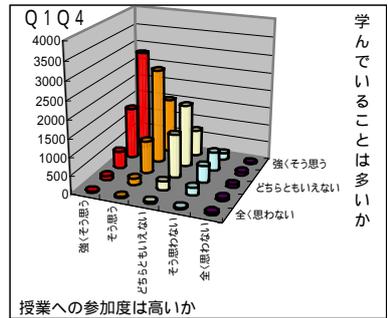
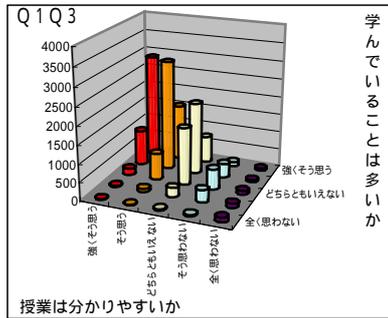
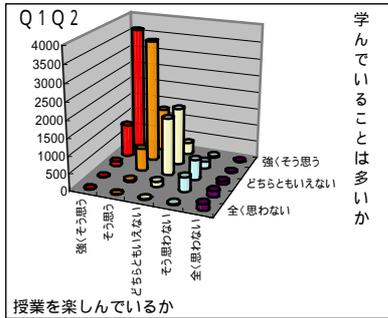
あなたはこの授業を同じ学科の後輩に勧めますか



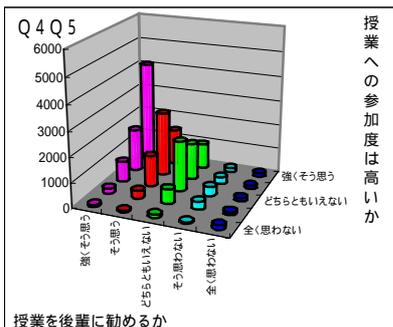
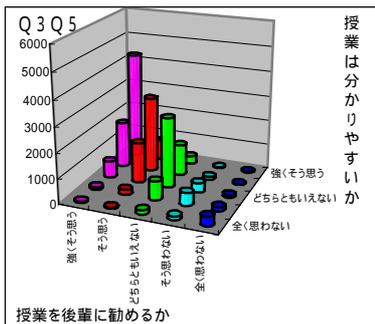
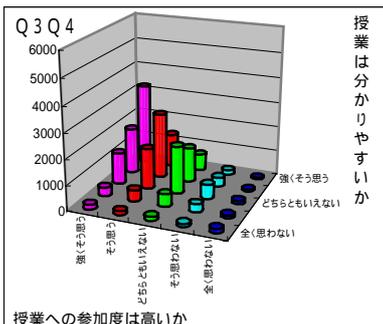
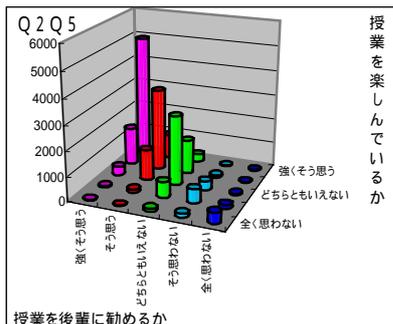
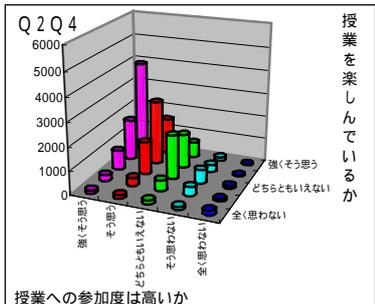
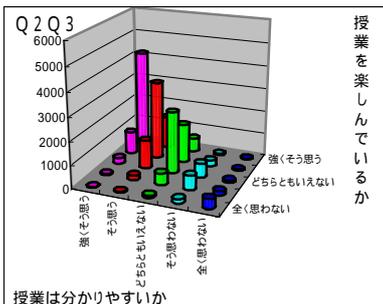
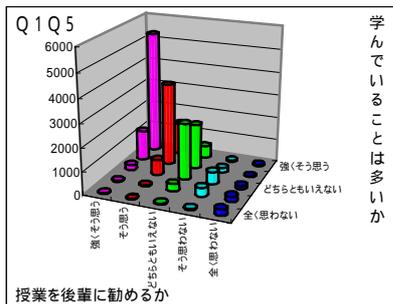
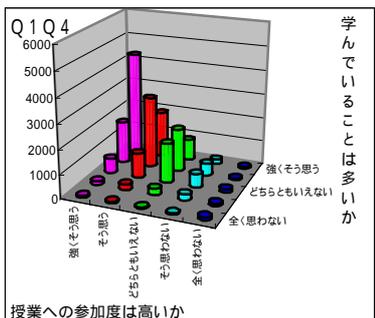
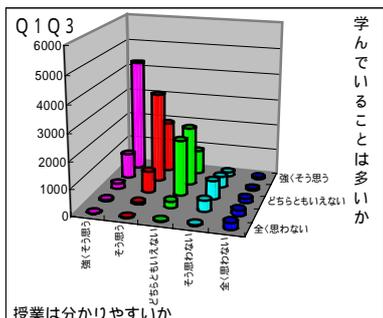
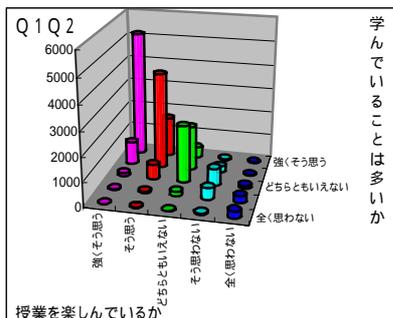
各質問の単純集計をみると、どの質問もほぼ6～7割がよい評価をしています。回収率が、50%なので、これをそのまま客観的な評価とするのは難しいものがありますが、少なくとも出席した学生は授業に対して高い評価をしているようです。

また、14・15年度を比較すると、その結果にほとんど変化がなく、年度間でみる限り、本学の学生がもっている授業に対する意識はアンケートの集計どおりであると思われます。

1 4年度全体クロス集計のグラフ



15年度全体クロス集計のグラフ



各質問でクロス集計をとると、どの結果も高い評価となっています。個別では当然異なる評価になりますが、大学全体として、美術学部、造形表現学部とも満足な評価になっていると思われます。

各質問の結果を結合させると、「授業で学んでいることが多く、楽しんでもあるし、出席もしており、後輩にも勧めたいが、授業内容が少し分かりづらいと感じる」ということが言えると思います。

自己点検・評価部会の活動状況

～ 準備作業 ～

準備会第1回打合せ(2004.2.13)
準備会第2回打合せ(2004.3.11)
準備会第3回打合せ(2004.3.31)
学科長会、教授会報告(2004.4.2・4・5)
部課長会議報告(2004.4.12)
事務担当者事前打合せ(2004.4.14)

～ 部会活動 ～

第1回自己点検・評価部会(2004.4.16)
第2回自己点検・評価部会(2004.5.19)
各セクションへの現状分析依頼(2004.5.27)
教育セクションへのヒアリング(2004.6.19・24・26・28・30)
グループ長会議(2004.6.23)
外部評価(2004.12.20・22)

～ 各グループの活動 ～

< 企画グループ >

第1回G会議(2004.4.22)
作業担当者説明会(2004.4.27・28)
第2回G会議(2004.5.19)
第3回G会議(2004.6.8)
事務担当者打合せ(2004.7.5)
第4回G会議(2004.9.8)
理事長、学長への経過報告(2004.10.7)

< 教育・研究グループ >

第1回G会議(2004.7.14)
第2回G会議(2004.7.27)

< 学生支援グループ >

第1回G会議(2004.4.28)
第2回G会議(2004.5.7)
第3回G会議(2004.7.20)
第4回G会議(2004.8.10)

< 施設グループ >

第1回G会議(2004.6.16)

< 社会貢献グループ >

第1回G会議(2004.5.26)
第2回G会議(2004.7.14)

< 入学・卒業グループ >

第 1 回 G 会議 (2004.5.25)

第 2 回 G 会議 (2003.7.29)

第 3 回 G 会議 (2004.10.7)

< 管理運営グループ >

第 1 回 G 会議 (2004.6.8)

マネージメント体制に関する職員アンケート (2004.6.9)

事務セクションへのヒアリング (2004.6.15・23)

第 2 回 G 会議 (2004.7.5)

第 3 回 G 会議 (2004.7.9)

第 4 回 G 会議 (2004.7.15)

第 5 回 G 会議 (2004.9.16)

< 総括グループ >

第 1 回 G 会議 (2004.10.15)



自己点検・評価部会長
森下 清子

「多摩美術大学 2000-2003」の出版にあたって

自己点検・評価「多摩美術大学 1997-98-99」に引き続き出版するものです。自己点検・評価を全学的に取り組み、その結果を教職員が共有できるためにはできるだけ多くの教職員が係われるように組織をつくり、今年の2月頃から巻末にあるような会合を重ねながら、進めて参りました。

前回と同様に藤谷宣人理事長、高橋史郎学長を委員長とする教育充実検討委員会の一部門である自己点検・評価部会が中心になって纏めましたが、今回は纏める過程において議論されるプロセスを重視し、全教職員が各々の分野または全体の中の部分について問題意識を持ち、纏める過程で抽出された課題、共通認識された問題点を、各部署のこれからの運営に積極的に活かされることを目的の一つとしました。

自己点検・評価部会のもとに6つの作業グループと、この6グループをサイドから支援するための企画グループを配しています。全体のまとめは各作業グループの取り扱い事項を設定し、その中に共通するとおもわれる見直し項目について、記載しています。教育・研究グループの各学科については学科長を中心にまとめていただきましたが、各学科の事情が異なるため、必ずしも同じフォーマットになってはいません。各学科については、当事者がまとめるのに平行して、理事長、学長、学部長、教務部長と各学科の専任教員と教育・研究について現状視察を兼ね、ざっくばらんに話し合える場を設け、ヒアリングというかたちでまとめましたが、重複したものあり、要望あり、将来計画ありで、これに関しては疎通を図ることが目的ですからまとめや結論は期待しないものだという付記しておきます。

多摩美術大学の全教職員が大学全体の現状、問題点、課題を把握するためには、なるべくコンパクトになるよう纏めるように編集した結果、細部については説明不足になっているところもありますが、これについては、ファカルティ、大学案内、シラバスで補足しています。今回は外部評価者として、教育研究を中心に會田雄亮先生、岡島達雄先生にまた財務を中心に和田義博先生に見て頂き、貴重な御意見を対談形式でまとめました。多忙の中、時間を割いて頂いた外部評価の先生方、協力して頂いた多くの教職員に感謝すると共に、この自己点検・評価のまとめが契機になり、見直し・改革につながり、さらなる大学の特徴ある大学に発展することを願って止みません。

多摩美術大学 2000・2003

編集 多摩美術大学 教育充実検討委員会自己点検・評価部会

発行日 2005年2月

発行 多摩美術大学

〒158-8558 東京都世田谷区上野毛 3-15-34

電話 03-3702-1141 (代表)

<http://www.tamabi.ac.jp>